

⑫ 実用新案公報 (Y2) 昭 58-54094

⑬ Int.Cl.³

識別記号

庁内整理番号

⑭ 公告

昭和 58 年 (1983) 12 月 9 日

A 61 F

5/01

6404-4 C

5/37

6404-4 C

(全 3 頁)

⑮ 鎖骨副子

⑯ 実用新案 昭 56-185807 満期

⑰ 出願 昭 56 (1981) 12 月 15 日

⑱ 公開 昭 58-92913 満期

⑲ 公告 昭 58 (1983) 6 月 23 日

⑳ 考案者 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

⑳ 出願人 山口 祐司

東京都文京区本駒込三丁目 34 番

は容易に行われるが、斜骨折の場合は固定の際または固定後に再転位を起し易い欠点があった。また再転位を防止するために固定を完全に施すと肩関節の拘縮が生じ易く、患者に与える苦痛が大きくなり、満足する固定法の工夫がなされていないのが現状である。

本考案者は、これら従来における鎖骨々折の固定法につき種々研究を重ねた結果、先に一对の腕と他の一对の腕とをそれぞれ遊動自在に係止して略菱形を形成せしめ前記各腕のそれぞれの先端部に肩係合体を設け、且つ肩係合体と腕とを遊動自在に設けた牽引矯正副子を考案した(実願昭 56-19523 号参照)。しかしながらかかる牽引矯正副子は背部にあてがい固定する場合、包帯で巻いてその上からテーピングをする必要があり、固定作業に時間を要する難点があった。

本考案者は、さらに作業性の良い副子とすべく種々改良を加え本考案を完成したものである。次に図面により本考案の鎖骨副子を説明する。まず第 1 図に示すように、本考案の鎖骨副子は一对の腕 1, 1' を上部腕支持体 2 にピン 3 により遊動自在に設ける。また、同様にして一对の腕 4, 4' を下部腕支持体 5 にピン 6, 6' で遊動自在に設ける。そして、腕 1 と腕 4 の他端を肩支持体 7 にピン 8, 8' によつて遊動自在に設ける。同様にして腕 1', 4' の他端を肩支持体 7 にピン 9, 9' により遊動自在に設ける。このように腕 1, 1', 4, 4', 上部支持体 2, 下部支持体 5 および肩支持体 7, 7' により構成される形状は略菱形を形成する。

肩支持体 7, 7' はある程度の厚みを有しているものでその一部に凹部を設け該部位にベルト係止具 10, 10' を装着する。ベルト係止具 10, 10' を装着する。ベルト係止具 10, 10' の係止方法としては例えばベルト係止部位の肩支持部材片を内側に折り曲げて環状を形成せしめそこにベルト係止具 10, 10' を装着する。

前記したように各腕、両肩支持体によつて構成

考案の詳細な説明

本考案は、鎖骨々折の整復後に固定するための鎖骨副子に関する。

鎖骨々折は、年齢を問わず、しばしば骨折する骨の一つであり、特に近年スポーツによる外傷の外、自動車事故等による損傷として頻度の高いものである。

従来鎖骨々折の徒手整復法としては種々の方法がある。しかしながら、従来の整復法は既して整復

3

4

される略菱形は各腕の両端部が遊動可能となつて
いるため菱形を種々変形させることが可能であ
る。

従つて上部腕支持体 2 と下部支持体 5 との距離
を短くすれば肩支持体 7 と肩支持体 7' との距離は
長くなり、逆に上部腕支持体 2 と下部支持体 5 と
の距離を長くすれば肩支持体 7 と肩支持体 7' との
距離は短くなる。このように菱形の形状を種々変
形させることによつて患者の肩幅に合わせるよう
調整することができる。

本考案は前記したように副子を任意の菱形に調
整し、これを固定するために固定支持体 11 を設け
る。この固定支持体 11 はその一端を上部腕支持体
2 に例えばピンで固定し、他端は下部腕支持体 5
に嵌入して遊動自在とする。そして該下部腕支持
体 5 には任意の菱形に調整した後該形状を保持す
るために下部腕支持体 5 にストツパー 12 を設け
固定支持体 11 を固定する。

腕 1, 1' にはベルト係止具 13, 13' を設ける。また
腕 4, 4' にはベルト係止支持体 14, 14' を設け、その
先端部にベルト係止具 15, 15' を設ける。ベルト係
止具 15, 15' は好ましくは腕 4, 4' の付け根部におい
て患者の背部に当る部分を内側にして折曲(例え
ば腕に対して 12°)させれば前記ベルト係止具 15,
15' が患者の背部にフィットする。このベルト係止
支持体 15, 15' の長さは、鎖骨副子を患者に装着し
た場合にその先端部が患者背部の脇の下あたりに
位置するような長さがあればよい。

本考案に係る鎖骨副子は第 3 図に示すように各

ベルト係止具にベルト 16, 16' を装着して患者にせ
おように装着する。第 4 図は本考案に係る鎖骨
副子を患者に装着した場合の前面の状態であり、
第 5 図はその背部の装着状態を示す図である。

本考案の鎖骨副子は例えば

(1) 装具が丈夫で軽く、菱形のため安定性がよ
く、自然的な牽引が保たれるため骨片転位が矯正
され再転位がない。長さの調節がきく、

(2) 呼吸の困難や骨折部の圧迫痛もなく、腋窩に
も無利がなく、疼痛が最少限であるため、早期に手
関節や肘関節の使用が可能となる。

(3) 就寝時にも疼痛がなく安眠ができる。

(4) 安静期間が短かく、小児の場合、安静の必要が
ない。

(5) 何回でも再使用でき、常に衛生的である。

(6) 装具着装のまま入浴が可能である。

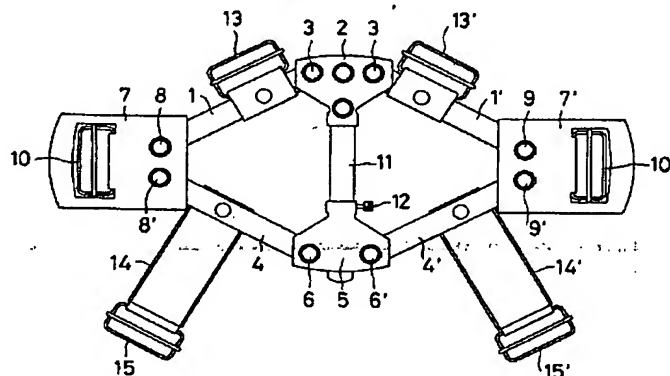
のような種々の利点を有する。

図面の簡単な説明

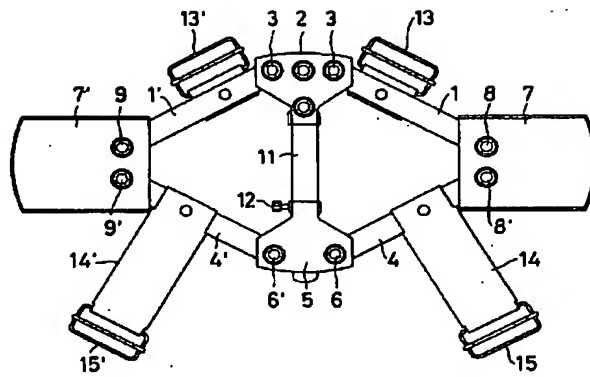
第 1 図は、本考案に係る鎖骨副子を示す正面図
であり、第 2 図は第 1 図の背面図であり第 3 図は
本考案の鎖骨副子にベルトを装着した場合の状態
図であり、第 4 図は本考案に係る鎖骨副子を患者
に装着させた場合の前面から見た状態図であり、
第 5 図は第 4 図の背面図である。

1, 1', 4, 4'……腕、2……上部腕支持体、5……下部
腕支持体、7, 7'……肩支持体、10, 10', 13, 13', 15,
15'……ベルト係止具、11……固定支持体、12……
ストツパー、14, 14'……ベルト係止支持体。

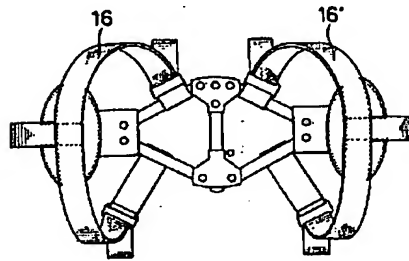
第 1 図



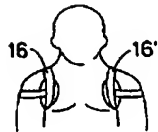
第 2 図



第 3 図



第 4 図



第 5 図

